

# 【ねがいはましては】

平成27年12月22日

KYOWA SCHOOL

第302号

「いろんな道」

漫画を世界的な文化へと昇華させた手塚治虫さんが、後輩漫画家たちに繰り返し言っていた口癖が「漫画家を目指すんだったら、漫画で勉強しなさんな」だったそうです。

「その道を究めるんだったら、その道だけじゃない、いろんな道を知りなさい。」といったところなのでしょうか。

「漫画を書きたかったら、その中には様々な人生ドラマが描かれるはずだ、だから外へ出ているんな方々の日々の暮らしを覗きなさい。感動にあふれた方々に一人でも多く出会いなさい。」と、言っているようです。

私たちは日々多くの成功者のニュースに出会っています。スポーツがその中心といったところでしょうか。勝者の記事が一面を飾り、見るものに感動や目標、夢を与えてくれます。それを見、少年少女たちは、「僕も私もあのようになりたい」と思うのは当然だと思います。

ただ、そこに少々気を配らなければならないものが待ち受けています。彼らが見ているのは勝者として成功した姿を見ているわけで、数多くのチャレンジャーの中の頂点を見ているわけであり、その裾野に広がる数えきれないほどの敗者の姿を見ていないということです。どのような練習を毎日積み重ねているのか、頂点に立つまでにどれだけの負けを味わっているのか。そこまで感じ取って地道に練習に励んでいる子どもたちは少ないかもしれません。

手塚さんが成功なさったから、成功者の近くで学びたいと思うのは当たり前かもしれません。しかし、それでは成功後の姿ばかりを見つめるだけで、その道の神髄まで見極めたとは言えません。

成功者に欠かせないもの・・・私は『土台』であると思っています。土を何度も踏み重ね、これでもかこれでもかと踏み重ね、痛めつけながら揺るぎのない土台を作ります。その土の踏みつけ時に感じる『痛み』こそ土台の中の土台。

スポーツをなさる方々の完成された肉体は、見るだけで想像ができます。

ではその道、学びの世界で土台作りをなさった方々ではどうでしょうか。一目ではわからないと思います。多くの学びを土台に積み重ね、重ねると同時に多くの痛みを伴いまた積み重ねる・・・。その結果、人々にとって尊敬の念を感じるものを発見したり、経験したり・・・。それを持って様々な形の表現法で人々の心を打つ・・・。

その頂点にあるものが、家族であればご両親だと思います。子にとって親は、自身のかげがえのないヒーローです。

親の日々の積み重ねを毎日のように見ている我が子・・・。その生き様を見ながら子は歩んでまいります。

見えてきたもの・・・我が子に〇〇しなさい〇〇しなさいと、毎日のように繰り返し命令調の言を浴びせていらっしゃる方がいらっしゃいますが、ご両親の生き様を真剣に見つめてきたお子さんは、おそらく命令されることなく我が道を黙々と歩んでいらっしゃるのではないのでしょうか。

さて、手塚さんのところに集まってくる漫画家の卵たち、手塚さんから「漫画で勉強しなさんな」と言われながら何を思ったのでしょうか。手塚さんを心から慕っているからこそ、近くに居たいと思うのは当然です。しかし、当の手塚さんはその方々を遠ざけることを言っているのです。

ご両親のことを心から尊敬している我が子は、きっといつまでも尊敬できるひとのそばに居たいと思っているはずです。あえてここで言わせていただければ、だからこそ、「この家にいなさんな、この家ばかりで勉強しなさんな。」と、言ってあげるべきではないのでしょうか。

「おい、人として完成したかったら、この場ばかりに居続けちゃ駄目だよ、もっともっと他を見て歩かなきゃな。」

勉強の世界も同じだと思います。勉強ができる人の近くに居れば勉強ができるようになるかもしれない。勉強で高得点ばかりを収めている人のまねをすれば、きっと自分も勉強ができるに違いない・・・。これすべて、全く逆の道を歩んでいるように思えます。

勉強に苦しんで苦しんで苦しみぬいて這い上がってきた方は、とてつもない時間と労力を費やしているはずです。その分、あっちへぶつかりこっちへぶつかりの痛みをたくさん抱えています。つまり土台がしっかりとできあがっています。そんな方のそばに居れば、その方の人生のにおいが感じられるかもしれません。

どのように考えても、楽しんで成績を上げようという考えは、危険な行為なのかなと考えざるを得ません。ただただ曳かれたレールの上を黙って歩けばいいというような楽な生き方をしていると、足もとをすくわれそうです。自分の生き方を他人が準備し、その上を黙って歩けば自然に成績が上がる・・・。宿題だから仕方がないか・・・しかられるからな。成績上げないと、また何言われるか・・・しょうがないやるか・・・。人らしくない瞬間。脅迫と命令でできあがってしまったような勉強の世界です。

一方、ご両親の生き様を見ながら黙々と自身で道を設定し歩もうとするお子さん。「きょうは一人で〇〇を旅してくるね。」などと、世の中探検をしたがるお子さん。

きっとそんなお子さんの10年後、社会の中で絶対に必要な「ひと」として活躍しているかもしれません。

あっちへぶつかり、こっちへぶつかり、それでもしつこく「わかりません」と言ってやってくる土台固めさんたちに毎日触れ合うことができることを、こころから感謝しています。ありがとう。